

剣道と気品

大日本武徳会剣道範士 持田盛二

剣道修行をする上に、種々の目標を立てることが出来ようと思ふ。昔から『大強速軽』と謂ふ事があるが、之なども誠によい教で、大きい、強い、速い、軽妙な剣、それぞれ修行の目標となるものである。

即ちこの意味から『気品』といふことも剣道修行上の大切な一目標にならうかと思ふ。

強いといふことも勿論重要なことであるが、強いだけでは物足りない。『強い剣道』であると共に『気品ある剣道』でありたいものである。

あの人の剣道に『気品』があるとか無いとかは誰にも自然に感じられるものであるが、然らばその気品とはどんなものかといふ段になると、容易に謂ひあらはし難い。氣を花に譬ふれば、気品はその薫りのやうなものではあるまいか、或は心を光になぞらへれば、気品はその映ひのやうなものではあるまいかと思ふ。

花鮮かならざれば薫りを得がたく、光明かならざればその映ひを望み得ないと同様に、気品は正しい心、澄んだ氣から、自然に発する得もいはれぬ氣高さである。

何事によらず、真劍になつてゐる時ほど、氣高いものではなく、三昧の境地、無念夢想の境地に這入りこんだ時ほど気品あるものはない。結局、真劍を離れて気品は得られぬものである。

一本の稽古もいやしくもせず、ただ真劍、ただ一心、その心掛けがあつたら求めずして上達し、求めずして『気品』ある稽古となるは請合である。斎戒沐浴、神の御前に出づるが如き嚴肅なる氣持を以つて、日々の稽古を真劍に励みたいものである。

『端正』といふことも気品を養ふ上に大切な要素の一つである。心が端正でなければ、気品は生まれぬ。形が端正でなければ気品は添はない。

徒に勝敗に拘泥する時、品が悪くなる。私心、邪念にとらはれて、稽古に無理がある中は氣品が添はない。

形の方面よりいふならば、稽古着や道具のつけ方が正しくなければ、品が添はない。姿勢の悪いのや動作の粗野なもの品を傷ける。

剣道は『礼に始まつて礼に終る』といはれるが、礼儀を離れて気品はない。

斯く段々に考へて来ると、心も形も共に正しく互に相たすけるのでなければ、真に正しい立派な剣道、気品ある剣道となることは出来ないのである。『心正しければ劍亦正し』といふのも、この意味に外ならないのである。

気品を養ふ上に於いて『氣位』といふやうな事も考へられる。即ち戦はずして敵を呑む氣位、遂には宇宙を吞吐する底の氣位に至つて、愈々氣品は高まるのである。

更に申したい事は剣道を單なる竹刀打と考へてゐる中は、本当の気品は生れないといふことである。この道は天地自然の理法に貫通する至高の大道である事を悟つて、修行の上にも

理想をもって進むことが肝要である。

理想ある剣道と然らざる剣道とは、気品の上にも天地雲泥の差が生じて来る。しかし無理に気品をつけようと気取って見ても本当の気品にはならない。気品は朝に求めて夕に得られるものではない。絶えず心を練り気を養ひ、心と業とが進むに従って、自然に備はるべきものである。

奥床しき気品漂ふところ、人格そのものに高き香薫じ、明るき光映ひ、誰しも自ら湧き起る尊敬を禁じ得ないものがある。

折れず、曲らず、鉄をも両断する斬れ味と、にえ、にほい、謂ふにいはれぬ気品をもつ名刀の如く、願はくば剣道に於ても『強さ』と『気品』の両者を併せ得たいものである。

了

注1 原文は旧漢字、旧仮名づかいであるが、旧漢字は新漢字とし、仮名づかいは原文の旧仮名づかいのままとした。

注2 送り仮名は現代の送り仮名とは違うが、原文のままとした。

注3 ふり仮名は、新仮名づかいとしてある。

編集 竹内 淳

(三菱武道会)